『あるサッカー少年の話』

小林忠嗣著「人格教育への挑戦」から

皆さんに、あるサッカー少年の話を紹介しましょう。

その少年の実力は、チーム内ではトップレベルに達していました。少年はチームのキャプテンを務め、ポジションはフォワード、チームの花形選手です。

「フォワードは点を取るのが仕事」彼はそう考えていました。

フォワードとしては、至極まっとうな捉え方です。ただし少年の問題は、それ以外のことにはまったく関心がないということでした。

味方のディフェンダーが守りを突破されて、敵のチームにシュートを決められると、試合中にも関わらず平気で味方のディフェンダーを罵りました。彼にすれば、他人のミスで負けてしまうことがどうしても納得できないのです。

チームメイトへの感謝の気持ちなど毛頭ありません。チームメイトのサポートによって戦えているという意識もありません。というよりも、むしろチームメイトに対しては不満ばかりを抱えていたのです。

キャプテンがそんな状態ですから、当然、チーム内のムードが良くなるわけがありません。誰も進んでキャプテンの指示に従おうとしませんでした。

そんなチームメイトに対して少年はなおさら感情を高ぶらせ、さらに罵声を浴びせてしまう始末でした。当然、チームは試合のたびに負け続けました。彼に言わせれば、チームが勝てないのもすべてチームメイトのせい。自分は頑張っているのに、他の選手に足を引っ張られ、犠牲にされていると感じていたのです。試合に負けた後、チームメイトを名指しで批判するなど、露骨に八つ当たりすることも少なくありませんでした。

そんな時彼は一冊の本に出会います。それはアメリカのメジャーリーグで活躍する、ニューヨークヤンキースの松井秀喜選手が書いた「不動心」という本でした。

少年も最初はサッカーと野球では世界が違うだろうと思いながら手に取ったのですが、読み始めるとすぐに引き込まれ、興奮しながら読み進めました。

その本には、試合中に手首を骨折するというアクシデントにも負けず、リハビリを重ねて見事に復帰するまでの松井選手の心の状態が克明に描かれていました。特に、自分の成績よりもチームの勝利を優先するというポリシー、そして監督やコーチ、チームメイト、自分の両親、そしてマスコミの人に対する感謝の気持ちが至るところに書かれていたのが彼の目に留まりました。

少年は、松井選手の野球にかける真摯な姿勢に感動し、自分の行動を改めようと心に誓ったのです。

ところが彼が松井選手を見習って、自分を変えようと思っても、なかなか行動に移すことができません。試合中にミスをしたチームメイトを罵倒してしまい、苦い思いを引きずったまま家に帰ってひとしきり後悔する日もありました。

「このままじゃ、だめだ。何も変わらない・・・・・」

そう思った少年は、どうすればよいのか自分なりにあれこれ考えてみました。

その結果、自分がみんなに感謝していることを伝えるため、何か行動しようと考えたのです。そこで彼が思いついたのは「ありがとう」を言葉にして伝える、ということでした。

少年は、練習前と試合前、必ずチームメイトに「ありがとう」と声をかけるようにしたのです。

「なんだあいつ、いきなり礼なんか言って、気持ちわりー！」

「なんか裏があるんじゃないの？」

始めた頃は、そんな風にささやく声が聞こえてきました。それまでの少年の行動を見てきただけに、チームメイト達も、彼の気持ちが図りきれなかったのです。それでも彼は毎日、毎日「ありがとう」を言い続けました。少しでも松井選手に近づくために、絶対にやめないと心に言い聞かせていました。

２～３ヶ月が経った頃、チームに変化の兆しが起こり始めました。練習中に少年が号令をかけ、指示を出したときにも、ろくに返事もしなかったチームメイト達が、返事をするようになったのです。そして、キャプテンの指示を少しずつチームメイトが聞くようになったのです。

それから次第にチーム内のムードが変わっていきました。練習に勢いと活気が出てきました。自然にチーム内のコミュニケーションが活発になり、選手達のプレースタイルも目に見えて積極的になってきました。

それからチームは、試合に勝つことが多くなったかと思うと、まるで生まれ変わったように勝利を重ねるチームに変貌したのです。

そしてとうとう地域のサッカーリーグで初の優勝を遂げたのでした。

その時、「あきらめないで、続けていて良かった」と少年は思いました。

一度や二度の行動では何も変わらない。しかし、毎日続けていると、いつか必ず状況が変わる。そのことを少年は、学んだのです。

そして少年は今も、以前にも増して、「ありがとう！」の言葉をチームメイト達に投げかけるようになっています。「ありがとう」と声をかけることが今や彼の習慣になってしまったのです。

【校長雑感】

何事も諦めないで続ける、繰り返す。そうするとその先に必ず光明が見いだされ、人は、また前に進むことができます。

「継続こそ力なり」　このことを生徒達に伝えていきたいと考えております。